



Title	出版物 RECNA ニュースレター Vol.6 No.1-No.4
Author(s)	
Citation	長崎大学核兵器廃絶研究センター年報, 2017, pp.26-41; 2018
Issue Date	2018-04-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/38397">http://hdl.handle.net/10069/38397</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-23T20:16:49Z

&lt;出版物&gt;



Vol. 6 No. 1 June 2017

## 2020年NPT再検討会議第1回準備委員会： 核兵器法的禁止交渉の影響は？

中村桂子

2017年5月2日～12日、2020年核不拡散条約(NPT)再検討会議に向けての第1回準備委員会がオーストリアのウィーンで開催された。オランダのファン・デル・クワスト軍縮代表部大使が議長を務め、111カ国の参加があったと伝えられる。最終日、議長の責任でまとめた作業文書として136項目からなる「議長概要(サマリー)」が発表され、閉幕した。

2週間の会期を通して、参加国からはNPT体制の重要性が異口同音に述べられたが、同時に、核軍縮の歩みの遅れに対する非核兵器国の不満、前回の再検討会議の決裂の要因ともなった先の見えない中東問題といった「おなじみ」の対立構造もあらためて浮き彫りとなった。そうした中、各国間の認識の違いが際立ったのが、3月にニューヨークで始まった核兵器禁止条約交渉とNPTの関係であった。

核兵器の法的禁止をめぐるこの間の議論においては、新たに作られようとする条約がNPT体制にどのような影響を及ぼすか、各国の立場により真っ向から異なる解釈がなされてきた。推進側の国々は核兵器禁止条約がNPTと完全に一致するものであり、核軍縮義務を定めた第6条の履行の促進につながると主張してきた。他方、核保有国や核抑止依存の国々は、コンセンサスに基づくアプローチをとらない核兵器禁止条約は締約国間の分断を生み、NPT体制を弱体化させ、よって核軍縮の実現を遠のかせる、という論を展開してきた。

今回の準備会合の議論においても、核保有国や核抑止依存の国々は、禁止条約制定の動きに対し、「役に立たず、非生産的で、一時の気の迷い」(ロバート・ウッド米大使、5月4日)といった辛らつな口調でその弊害を訴えた。しかし、禁止条約が実際どのようにNPTを弱体化するかに対する具体的な説明は不十分なままであり、また、核軍縮を前進させるための新たな提案を出すこともなく、従来の「ステップ・バイ・ステップ」や「プログレッシブ(漸進的)」アプローチの有効性が繰り返されるに留まった。

同様の物足りなさは日本の提案にも感じられた。禁止条約交渉に背を向けたその姿勢が被爆地をはじめ国内外の厳しい批判に晒される中、日本政府に期待されていたのは、「核兵



準備委員会会場のウィーン国際センター 撮影:RECNA

器国と非核兵器国の橋渡し役」としての具体的中身を伴ったイニシアティブを示すことだったろう。しかし、今回の準備会合に閣僚級として唯一人出席した岸田外務大臣が出した提案は、核兵器国・非核兵器国の有識者による賢人会議の設置といった、「問題の先送り」とも捉えかねられないものであった。核軍縮・不拡散分野での賢人会議には日豪政府が共同でイニシアティブをとった2008年設立の「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会(ICNND)」などの前例があり、その成果は日豪政府の実際の政策に一定の影響を与えているが、採用されていない提言も多い。当然ながら選ばれるメンバーにも左右されるだろう。この賢人会議が、核兵器国や核の傘を禁止条約に巻き込んでいく具体的プロセスを提示する役割を担うのであれば歓迎したい。

次回の準備会合は、2018年4月23日～5月4日にジュネーブで開催され、禁止条約制定後初の準備会合となる可能性は高い。禁止条約に署名批准しない国々はますますその説明責任が問われることになるし、推進側の国々にとっても、禁止条約を梃子に核軍縮義務の履行を迫る新たな戦術やレトリックが求められることになる。「おなじみ」の議論に新しい風が吹くことが期待される。

(なかむら けいこ、准教授)

## 研究会発足

# 「長崎被爆・戦後史」研究会

桐谷多恵子

本年度(2017年度)核兵器廃絶研究センター(RECNA)では、「長崎被爆・戦後史」研究会を立ち上げた。

私は、広島と長崎の両市の「復興」を被爆者の視点から再評価することに取り組んできた。テーマとの出会いは、広島での院生時代にある。知り合いになった被爆者の方々から「復興」への違和感を耳にした時の衝撃からだった。広島に住んだ当初から、広島での「復興」を「奇跡の復興」と感嘆していた。しかし、広島で暮らしてきた被爆者から見た「復興」は、私から見るとは、随分と違いがあることに気が付いた。被爆者と同時代に生き、その声を直接に聞くことのできる研究者として、改めて被爆地の「復興」を被爆者の視点から検討し、残す意義があると考えて研究に取り組んでいる。

被爆体験そのものに限らずに、戦後史においても、被爆体験者と被爆を体験していない人びとの意識の隔たりは埋めることができないほどに大きく深い。しかし、その隔たり自体、被爆を体験していない人びとには見え難い。

被爆から120年後の2065年、被爆体験者がおられなくなった世界で、私たちは被爆体験をどのように語り、被爆後の歴史を綴っているのだろうか。そのように考えた時、いま取り組むべき課題は多い。戦後72年という年月の中で取り組まれてきた、記録や研究の数々を、被爆地から生まれた人類の知的遺産として受け止め、被爆者をはじめ市民の人々と共に議論を行いながら、検討することはできないだろうか。その問題意識が研究会の出発点には存在している。これらの活動の原点

は、核兵器を投下する側の議論ではなく、核兵器によって被爆した者の声に他ならない。

本研究会は具体的な実践の場として、長崎の問題に取り組んできた研究者や市民運動家、有識者たちを招聘し、報告を聞き、参加者を含めて自由な討論を行う。その作業を通して、長崎の被爆体験と戦後史から、被爆を直接体験していない世代が継承すべき課題と意義を明らかとすることを目的とする。

さて、6月2日に開催した第1回目の研究会では、ほぼ半世紀「長崎にあつて哲学する」という活動を続けてこられた高橋眞司氏(元長崎大学教授)をお招きし、被爆者の「死と生」、「戦前責任と平和責任」、3・11後の「核暴力」の諸問題について報告を伺う場を設けた。研究者をはじめジャーナリストや有識者、およそ25名の参加があり、報告者と参加者との間で活発な議論が行われた。特に、「浦上燔祭説」を巡る解釈や「祈りの長崎」との繋がり、更には長崎の「二重構造」に対する評価について議論が交わされた。また、長崎被爆における「三菱の問題」が上がり、今後の研究会においても引き続き検討するテーマであると確認された。

研究期間は今年度と来年度の2年間とし、1年に前期と後期の2回の研究会を計画している。次回の研究会は、2017年12月の予定である。

(きりや たえこ、RECNA客員研究員)

## ナガサキ・ユース代表団

# ウィーンでの活動

「ナガサキ・ユース代表団」5期生の9名は、5月2日～12日にウィーンで開催された2020年NPT再検討会議第1回準備委員会に参加した。現地では、会議の傍聴の他、韓国の大学生との協働による国連内自主ワークショップの開催、ウィーン市内の日本人学校での出前講座、在ウィーン国際機関の訪問、各国から集まった外交官・NGO関係者・同世代の若者らとの意見交換など、連日にわたって精力的な活動を展開した。より詳しい活動の様子についてはブログをご覧ください。

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/youth-blog-2017>

## 教育の重要性を再確認

ナガサキ・ユース代表団5期生 光岡華子

5月5日、私達はウィーン日本人学校で出前授業を行いました。小学校1～3年生の29名、小学校4年生～中学生の21名の二つに分かれて、私は低学年のグループで授業を行いま



した。“核兵器の問題は昔の話ではなく、今の自分たちにも関係がある”ということ子どもたちに伝え、感じてほしいという想いで実践に取り組みました。

授業の間、子どもたちは真剣に私の話を聞いてくれました。純粋な子どもたちが私を見る目には、この子たちのために全力で向き合おうという気持ちにさせられ、より良い未来を願うのは

決して自分たちのためだけではなく、目の前の子どもたちのことを思うからであると、自分の中にある使命感を再確認しました。その子たちが平和な世界を築いていけるか、そこに教育が与える影響はとても大きなものであるため、教育の重要性も改めて感じました。

この経験をもっと多くの若者にしてほしい！もっとこの授業を幅広く提供したい！と思い、現在、この事業を行う団体を設立したいと考えています。これまで私は、核兵器のない世界は必ず来るということを信じ、希望を持ち、行動を続ける多くの人たちと出会い、刺激を受けてきました。今度は私自身が、誰かに影響を与えられるような存在になりたいと思います。

(みつおか はなこ、長崎大学教育学部4年)

## 肌で感じた世界の動き

ナガサキ・ユース代表団5期生 酒井 環

ウィーンに滞在し、NPT再検討会議の傍聴やサイドイベントの参加をして私が感じたこと、それは多くの方々との「出会い」を通して自分の成長を実感できたことです。ウィーンで、国連内での出会いはどれほどだったでしょう。実際に会議を傍聴し、その国の生の意見を肌身で感じていたことはもちろん、政府関係者の方や、国際機関職員の方、NGOの方、同世代の大学生や高校生など、ウィーンに滞在していた2週間ほどで多くの

人々と出会い、国際的な視野を広げ、これまで以上に成長することができました。

その中でも、最も印象に残っているのが国際原子力機関(IAEA)でのショートブリーフィングです。本来ならば絶対に見ることも、体験することもできなかったことが今回多くの方々の支えで実現しました。

私達はこれまで事前学習として、IAEAについても学んできましたが、今回実際に使用されている器具を用いて実演されているところを見て、体感して、改めて国際機関が担う役割の重要性を再認識することができました。

それというのも、会議の中でIAEAをはじめ国際機関の働きが重要であるという内容の意見を述べられる国が数多くあったからです。だからこそ、こうして実際に自分達でその業務を体感し、時には深いところまで質問をしていく中で、改めてこの一つひとつの仕事が核不拡散を進める一つの重要なステップになっているのだと感じました。

他にも多くの方々との出会いの中で学び、感じ、改めて現代の核情勢について主体的に考えることができた私たち5期生。だからこそ、この経験から今後のユース代表団5期生として精神的に活動し、さらに自分たち自身も高めていきたいと思えます。

(さかい たまき、長崎純心大学人文学部2年)

## RECNAの活動

2017年4月1日～2017年6月30日

4月3日(月) ～4月5日(水)	■クリティカル・イシューズ・フォーラム 一軍縮教育国際会議(長崎) 鈴木センター長、中村准教授	4月20日(木)	■商工会議所講演会 中村准教授
4月15日(土)	■2017年度日本軍縮学会研究大会 「核兵器禁止条約に向けた国際動向」 黒澤満(RECNA顧問) 「国際司法における核兵器：マーシャル諸島の提訴の意義」 広瀬副センター長 東京工業大学	4月21日(金)	■ゲルニカ爆撃80年 国際人道法と武力紛争犠牲者国際会議 “Challenge of Nagasaki University” 広瀬副センター長 United Nations University for Peace (コスタリカ)
4月17日(月)	■RECNAラウンドテーブル(東京) 講師：グレゴリー・カラーキー博士 (Union of Concerned Scientists)	4月25日(火)	■国際赤十字・赤新月運動核兵器禁止及び廃絶に係る会議 講演：吉田副センター長 ホテルニュー長崎
4月19日(水)	■The 15th Model United Nations Conference at University for Peace Keynote Speech: 広瀬副センター長 United Nations University for Peace (コスタリカ)	5月2日(火) ～5月12日(金)	■2020年NPT再検討会議第1回準備委員会 モニタリング(ウィーン) 調副学長、鈴木センター長、中村准教授、 ナガサキ・ユース代表団
4月20日(木)	■九州地区大学図書館協議会総会 講演：吉田副センター長	5月9日(火)	■長崎県立長崎東高校スーパーグローバル ハイスクール意見交換会 広瀬副センター長
		5月10日(水)	■第33回RECNA研究会「南太平洋における 英国の核実験の歴史と日本」 講師：Nic Maclellan氏 (ジャーナリスト)

- |   |   |
|---|---|
| <p>5月15日(月) ■Dr. Ole Christian Reistad, Institute for Energy Technology, Norway 来訪<br/>鈴木センター長、広瀬副センター長、中村准教授</p> <p>5月22日(月) ■長崎市立黒崎中学校平和学習<br/>講師: 吉田副センター長</p> <p>5月27日(土) ■平成29年度第1回核兵器廃絶市民講座<br/>「トランプ政権の核政策と日本」<br/>講師: 太田昌克 (RECNA客員教授)、吉田副センター長<br/>コーディネーター: 鈴木センター長<br/>長崎原爆死没者追悼平和祈念館</p> <p>5月30日(火) ■Georgetown University Qatar 学生来訪<br/>吉田副センター長</p> <p>6月2日(金) ■第1回RECNA「長崎被爆・戦後史」研究会<br/>「長崎にあって哲学する-その発端・構想・展望」<br/>講師: 高橋真司 (長崎総合科学大学「長崎平和文化研究所」客員研究員)</p> | <p>6月7日(水) ■ナガサキ・ユース代表団5期生活動報告会</p> <p>6月11日(日) ■第29回「ながさき平和大集会」<br/>ナガサキ・ユース代表団<br/>良順会館 長崎大学医学部</p> <p>6月19日(月) ■核兵器廃絶長崎連絡協議会総会<br/>長崎大学図書館多目的ルーム</p> <p>6月19日(月) ■2017年度版核弾頭・核物質データポスター完成記者会見 RECNA会議室</p> <p>6月20日(火) ■長崎県立長崎東高等学校平和学習<br/>講師 吉田副センター長</p> <p>6月22日(木) ■韓国全北大学校短期留学特別講義<br/>広瀬副センター長</p> <p>6月24日(土) ~6月25日(日) ■「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)」会合 ウランバトル、モンゴル</p> <p>6月28日(水) ■「北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)」報告記者会見 RECNA会議室</p> |
|---|---|

## おしらせ

### 平成29年度核兵器廃絶市民講座

#### 「核兵器のない世界をめざして」

第2回 「ヒロシマ・ナガサキのメッセージを世界にそして未来世代に 〈核兵器のない平和な世界をめざす平和首長会議の活動〉」

講師: 小溝泰義 広島平和文化センター理事長  
聞き手: 森永 玲 長崎新聞論説委員長/RECNA客員教授

日時: 2017年7月22日(土) 13:30~15:30  
場所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

#### 第3回 「核兵器禁止条約への動きとこれからの展望」

講師: 中村桂子 RECNA准教授  
日時: 2017年9月2日(土) 13:30~15:30  
場所: アルカス佐世保 大会議室A

※いずれも、受講料は無料、参加申し込みの必要はありません。

### RECNA叢書第2巻刊行

ハロルド・ファイブソン、アレクサンダー・グレイザー、ジア・ミアン、フランク・フォン・ヒッペル著、鈴木達治郎監訳、冨塚明訳 『核のない世界への提言: 核物質から見た核軍縮』がRECNA叢書第2巻として法律文化社から刊行されました。定価は3,500円(税別)です。お近くの書店等でお求めください。



### 世界の核弾頭・核物質データポスター

2017年度版「世界の核弾頭データポスター」および「世界の核物質データポスター」が完成しました。日本語版はA1版とA2版があります。英語版とハングル版はPDFのみです。いずれも次のURLからダウンロードすることができます。

<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/nuclear>

日本語版のポスターをご希望の方は、RECNAまでお問い合わせください。

(数に限りがあります)



### 2017年4月1日付け人事

客員教授 太田昌克 共同通信社編集委員(論説委員兼務)

## RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

第6巻1号 2017年6月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター  
〒852-8521 長崎市文教町1-14  
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165  
E-mail: recna\_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp  
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

印刷 インテックス

©2017 長崎大学核兵器廃絶研究センター

# RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

Vol. 6 No. 2 September 2017

## 土山秀夫先生のご逝去に際して

調 漸

9月2日に土山先生がご逝去された。長い入院生活の後、そろそろ退院できると感じていただけに突然の訃報は衝撃だった。

最初にお会いしたのは私が米国の国立衛生研究所(NIH)留学中、長崎大学長として外遊中に現地の長崎大学の留学生を数人集めて食事をご馳走して下さった際である。大学の将来や学問の面白さを楽しそうに語っておられた笑顔が忘れられない。

核兵器廃絶の指導的な存在であり、核兵器廃絶研究センター(RECNA)にとっても生みの親であり、行くべき道を照らす存在であった。設置準備委員会のメンバーでもあり、当然の成り行きとして、発足後は顧問として運営に参画いただいた。

RECNAは、北東アジア非核兵器地帯構想を育て、この実現のためのパネルを立ち上げ、一方で多くの若者たちを育成しNPT再検討会議に送り込んだ。

非核化をめぐる国際情勢は国連での核兵器禁止条約採択を受けて一気に動き始めた、これからが正念場を迎える。

核兵器廃絶を「理性と感性を車の両輪のように取り組め」という土山先生の言葉を胸に前に進みたい。

(しらべ すすむ、学長特別補佐)



RECNA開設記念シンポジウム講演時の土山先生

(2012年4月18日 良順会館 撮影:RECNA)

## 核兵器禁止条約

## 条約案を賛成多数で採択

中村 桂子

今年7月7日、ニューヨーク国連本部で開催されていた「核兵器禁止条約」交渉会議は、同兵器を全面的に非合法化する国際条約を採択し、閉幕した<sup>1</sup>。投票結果は、賛成122カ国、反対1カ国(オランダ)、棄権1カ国(シンガポール)であった。

交渉会議は、昨年12月23日に採択された国連総会決議A/71/258の決定に基づき、3月27日～31日、6月15日～7月7日の2会期にわたり、およそ130カ国の参加の下で開かれていたものである。9つの核保有国及び「核の傘」依存国(NATO加盟国のオランダを除く)は参加をボイコットした。日本政府は3月27日の会議初日に高見澤将林軍縮大使が登場

し、「(交渉会議に)建設的かつ誠実に参加することは困難」と述べて退席するという異例の対応であった。

採択された条約は、核兵器の開発、実験、生産、製造、取得、保有、貯蔵、移譲、受領、配備、使用ならびに使用の威嚇を禁止し、また、それらの禁止行為の援助、奨励、勧誘等を禁止するものである。とりわけ使用と使用の威嚇が禁止されたことで、拡大核抑止(「核の傘」)を含めた核抑止依存政策の正当性は大きく損なわれることとなった。また、条約には核兵器の使用や実験の被害者に対する援助や環境回復の義務も明記されている。

広島、長崎の被爆者と世界各地の核実験被害者に言及し

<sup>1</sup> 核兵器禁止条約の採択を受け、RECNAでは、その歴史的意義と今後の課題についてまとめたポリシーペーパー「核兵器禁止条約採択の意義と課題」を発行した。全文をRECNAホームページに掲載している。 <http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/topics/16841>

た条約前文に明記されているように、条約は、核兵器の非人道性とそのリスクに対する国際社会の認識を基盤とし、その全面的禁止から廃絶につながる道を描くものである。オーストリア、メキシコ、アイルランド、南アフリカ、ブラジルといった条約推進派の国々、そしてそれを支える市民社会の当面の狙いは、核兵器の保有や使用に反対する国際規範の確立にある。すなわち、核兵器に「悪の烙印」を押し、核抑止政策の正当性を失わせることで、停滞を続ける核軍縮の現状に風穴を開け、その前進を図ることを目指している。

他方、核兵器「依存国」は、この動きに背を向け、反発を強めている。米、英、仏の3カ国は、7月7日の採択後に出した共同声明で、条約への署名、批准を行う意思はなく、今後もそうすることはないと断言した。その際に3カ国が、「(条約加入は)70年以上にわたり欧州と北アジアの平和の維持に不可欠であった核抑止政策に反する」ものであると、「核の傘」政策に言

及しながら核兵器の必要性を主張していることに注目したい。

米国は常に、自国の核兵器保有の正当性を担保する論拠として、同盟国への「核の傘」供与の必要性を掲げてきた。オバマ前大統領の「プラハ演説」しかりである。この事実はすなわち、「核の傘」依存国が政策転換に進むことで、核保有を正当化する論拠の一端を崩すことができることを意味する。

北朝鮮の核をめぐる現在の状況は、核抑止力がアジアの地に「平和の維持」をもたらしていないことの証左にほかならず、核抑止戦略の功罪を冷静に見極める時に来ている。条約は9月20日から署名開放となり、50カ国の批准をもって発効となる。日本を含む「核の傘」依存国の動向がますます重要となっている。

(なかむら けいこ、RECNA准教授)

## 北東アジアの平和と安全保障に関するパネル(PSNA)

### PSNA第2回会合

### ウランバートルで第2回会合

鈴木 達治郎

2017年6月24日(土)ー25日(日)の2日間にわたり、標記第2回会合が、Asia Pacific Leadership Network for Nuclear Non-Proliferation and Disarmament (APLN)北東アジアグループ、並びに地元NGO団体ブルーバナーとの協力の下で、ウランバートル(モンゴル)で開催された。今回モンゴルで開催した理由の一つは、北朝鮮からの参加を可能とすることであり、招待状を発送したものの、残念ながら今回も最終的には北朝鮮からの参加は実現しなかった。その中で、トランプ新政権の核政策、核兵器禁止条約交渉の今後、北東アジア非核兵器地帯実現への課題、そして北東アジアにおける民生用原子力利用の課題の4つのセッションで活発な意見交換が行われた。

途中、共同議長4名(ハルペリン博士、ハメル・グリーン教授、文教授、梅林客員教授)による共同声明の発表記者会見が行われた。共同声明では次の4点が提言された。① 関連各国は戦争につながりかねない行動を避け、中国による6カ国協議か二国間協議の再開を早期にすすめるべき ② 関係各国の協議は北朝鮮の核問題にとどまることなく、北東アジア地域の安全保障と平和に関する諸課題(例:朝鮮戦争の終結、北東アジア非核兵器地帯の創設、地域間諸国による安全保障協議の場の創設等)を議論すべき ③ 関係諸国政府高官による「対話再開」のイニシアチブを歓迎する。そのような対話をすぐにでも始めるべき ④ THAAD(高高度防衛ミサイルシステム)をはじめとするミサイル防衛の導入については地域に及ぼす安全保障やその他のあらゆる影響をさらに



第2回北東アジア平和と安全保障パネル会合参加者

2017年6月25日 ウランバートル 撮影RECNA

深く検討すべき。

(共同宣言全文<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/psnaactivities/16578>)

今回はロシアかソウルでの開催が提案されており、北朝鮮の参加をぜひ実現する方向で検討をすすめることになった。また、会議に提出されたペーパーや議論の要旨とその分析を、新たに長崎大学で創刊される英文ジャーナル「Journal for Peace and Nuclear Disarmament」に投稿することが奨励され、今後はホームページの改善など発信力を強めていくことになった。

(すずき たつじろう、RECNAセンター長)

- |                       |   |          |  |
|-----------------------|---|----------|--|
| 8月12日(土)              | ■日中学生会議安全保障分科会来訪<br>(広瀬副センター長)  | 9月4日(月)  | ■核廃絶を考える英文ジャーナル<br>"Journal for Peace and Nuclear Disarmament"<br>の発行に係る記者会見<br>東京会場:片峰学長、吉田副センター長<br>(フォーリンプレスセンター)<br>長崎会場:鈴木センター長 |
| 8月18日(金)<br>~8月19日(土) | ■広島国際ジュニアフォーラム<br>(中村准教授)   | 9月4日(月)  | ■NHK「クローズアップ現代」出演<br>(鈴木センター長)   |
| 8月19日(土)              | ■佐賀県保険医協会講演 (鈴木センター長)   | 9月9日(土)  | ■ユース学生と中央大学学生との意見交換会<br>(鈴木センター長、ユース代表団)   |
| 8月21日(月)              | ■一般社団法人エネルギー・資源学会<br>サマーワークショップ2017講演<br>(鈴木センター長)                        | 9月14日(木) | ■衆議院原子力問題調査委員会<br>(鈴木センター長)  |
| 8月21日(月)<br>~8月31日(木) | ■62nd Pugwash Conference on Science and<br>World Affairs(カザフスタン)(鈴木センター長) | 9月24日(日) | ■宮崎Peace Wave 核兵器廃絶を目指す講演会<br>(広瀬副センター長)   |
| 9月2日(土)               | ■土山秀夫顧問逝去(92歳)  | 9月28日(木) | ■土山秀夫顧問 長崎市・長崎大学合同葬  |
| 9月2日(土)               | ■平成29年度第3回核兵器廃絶市民講座<br>「核兵器禁止条約への動きとこれからの展望」<br>講師:中村准教授<br>場所:アルカスSASEBO | 9月30日(土) | ■核兵器廃絶ー地球市民ナガサキ集会 シンポジウム2017「核兵器禁止条約成立が切りひらく地平」<br>コーディネーター:朝長客員教授<br>パネリスト:中村准教授<br>場所:長崎原爆資料館                                      |

## お知らせ

### 平成29年度核兵器廃絶市民講座

#### 「核兵器のない世界をめざして」

#### 第4回 「朝鮮半島の非核化:その現状と展望」

講師: 孫 賢鎮(広島市立大学平和研究所准教授)  
日時: 2017年11月11日(土) 13:30~15:30  
場所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

#### 第5回 「戦後長崎における被爆の痕跡と復興

——1940年代、50年代を中心に——

講師: 桐谷 多恵子(RECNA客員研究員)  
日時: 2017年12月16日(土) 13:30~15:30  
場所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

※いずれも、受講料は無料、参加申し込みの必要はありません。

### 公開シンポジウム

「ハマースホルド元国連事務総長の遺産 —その現代的意義について—」

講師: マグヌス・ローバック駐日スウェーデン大使  
日時: 2017年10月15日(日) 15:00-17:00  
場所: 長崎大学医学部良順会館1F専斎ホール

※受講料は無料、逐次通訳あり、参加申し込みの必要はありません。

### ナガサキ・ユース代表団第6期生募集

対象:長崎県在住・在学・在勤の18歳~25歳程度の若者(高校生を除く)

応募説明会:

第1回10月12日(木)18:30~20:00

場所:長崎大学核兵器廃絶研究センター1F会議室

第2回10月13日(金)18:30~20:00

場所:長崎県立大学シーボルト校特別会議室

第3回10月14日(土)10:30~12:00

場所:長崎大学核兵器廃絶研究センター1F会議室

※詳細は核兵器廃絶長崎連絡協議会事務局(Tel.095-819-2255 Fax.095-819-2165)までお問い合わせいただくか、  
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/nagasaki-youth>  
でご確認ください。



第6巻2号 2017年9月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター  
〒852-8521 長崎市文教町1-14  
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165  
E-mail: recna\_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp  
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

印刷 インテックス

©2017 長崎大学核兵器廃絶研究センター



## 2017年長崎平和宣言

## 「長崎を最後の被爆地に」

広瀬 訓

今年の長崎平和宣言は、国連での核兵器禁止条約交渉の合意を受け、「核兵器の無い世界」というゴールへ向けての、力強い呼びかけで始まっている。これは被爆地ナガサキがいかにこの条約を待ち望んでいたかを示すものである。今ようやく永年の悲願であった核兵器の禁止が国際条約という具体的な形として提示されたのであり、その喜びは言葉に尽くせないものがあるだろう。

しかし、宣言文でも述べられている通り、これは終わりではなく、具体的なゴールが設定されたというだけであり、そこに至るまでの道程が依然として長く、険しいものであるという事実には変わりはない。何よりも日本政府自身がこの条約交渉に反対している。海外からの「世界に向けて核兵器廃絶を訴える前に、まず自国の政府を説得すべきではないか」という厳しい指摘にまず応えなくてはならない。そのためには、日本政府が繰り返し強調している「人道性と安全保障のバランス」を徹底的に再検討し、そのバランスが今や核兵器廃絶の方向へ大きく傾いていることを論証する必要がある。その観点から、今回の平和宣言はRECNAに対して、もより大きな責任の自覚を促すものであると言わなければならない。

さらに、今年の平和宣言は、昨年までよりも明確な表現で、被爆体験の継承について重い課題を投げかけている。ごく最近、長崎は長年にわたり被爆者として核兵器廃絶へ向けて指導的な役割を果たし続けてこられた日本原水爆被害者団体協議会代表委員の谷口稜暉氏と元長崎大学学長でRECNA顧問の土山秀夫博士の二人を失ったばかりである。広島でも長崎でも、自らの体験として原爆の非人道性を語ることでできる方はごく限られた数になってしまった。もちろん様々な形で体験を継承しようとする試みは進められているが、それでも核兵器の恐ろしさを体験として語るができる人がいなくなるというのは、深刻な事態である。

北朝鮮の核・ミサイル問題の進展を見る限り、昨今「核抑止による安全保障」という言葉が極めて安易に使われているのではないかという疑問を禁じ得ない。果たして「核抑止」という核兵器のもたらす恐怖の下での「安全」という言葉が本当に市民の「安全」を保障するものなのか、核兵器禁止条約の採択を契機として真剣に問い直す必要性を示唆する今年の平和宣言である。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

## RECNAの活動

2017年7月1日～2017年9月30日

7月2日(日) ～7月5日(水)	■ Nuclear Security/Cyber Security Workshop(イギリス) (鈴木センター長)	8月7日(月) ～8月10日(木)	■ 第9回平和首長会議総会(長崎) (鈴木センター長、中村准教授)
7月2日(日) ～7月10日(月)	■ 核兵器禁止条約交渉モニター(アメリカ) (中村准教授)	8月6日(日)	■ キャンパス・アジア(早稲田大学)プログラム 来訪 (広瀬副センター長)
7月8日(土)	■ 立命館アジア太平洋大学とユース代表団との 平和交流(長崎) (吉田副センター長 ユース代表団)	8月8日(火)	■ RECNAラウンドテーブル(長崎) 講師:中満泉国連事務次長
7月15日(土)	■ 青森県医師会生涯教育講座 (鈴木センター長)	8月8日(火)	■ 学生・市民との対話集会:中満泉国連事務 次長を迎えて (吉田副センター長)
7月19日(水)	■ 外国メディア在京特派員 プレスツアー RECNA訪問 (鈴木センター長)	8月8日(火)	■ 学生との意見交換会:蓮舫参議院議員を 迎えて (広瀬副センター長)
7月22日(土)	■ 平成29年度第2回核兵器廃絶市民講座 「ヒロシマ・ナガサキのメッセージを世界にそ して未来世代に」 講師:小溝泰義 (広島平和文化センター理事長) 森永 玲(客員教授) 場所:長崎原爆死没者追悼平和祈念館	8月8日(火)	■ 日本マスコミ文化情報労組会議 (中村准教授)
7月29日(土)	■ 国際平和シンポジウム2017 「核兵器廃絶 への道」(広島) (鈴木センター長、吉田副センター長)	8月9日(水)	■ 外務省招へい事業 Mr. Ghulam Abbas(パ キスタン)来訪 (広瀬副センター長)
		8月10日(木)	■ 日本非核宣言自治体協議会親子記者取 材 (吉田副センター長)

# RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

Vol. 6 No. 3 December 2017

## 公開シンポジウム「核の脅威にどう対処すべきか：北東アジアの非核化と安全保障」

鈴木 達治郎

2017年11月23日、東京大学において、東京大学政策ビジョン研究センターとRECNAの共催で、上記タイトルの公開シンポジウムを開催した。本シンポジウムは長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)を中心に、東京大学、広島市立大学、一橋大学等の研究者が、科研費「核廃絶実現に向けての促進・阻害要因の分析と北東アジアの安全保障」(平成27～29年度)の成果を踏まえて、今後の核の脅威への対応と北東アジアの安全保障について討論を行ったものである。

前半は研究チームを代表して、RECNAの鈴木、広瀬教授が研究成果の概要を発表した。ここでは、「非核保有国(「核の傘」国)の役割」「トラック2(非政府機関による信頼醸成措置)」「核軍縮の検証」の3つのテーマについて発表がなされた。この研究成果は「核の脅威にどう対処すべきか：北東アジアの非核化と安全保障」(仮題)(藤原帰一監修、広瀬訓・鈴木達治郎編著)と題して、法律文化社より2018年3月にRECNA叢書第3号として出版されることが紹介された。

後半は、研究プロジェクトチームのメンバーで、上記出版書の監修者でもある藤原帰一東大政策ビジョン研究センター長と、RECNA客員教授でもある太田昌克共同通信編集委員の二人に、パネリストとして参加していただき、吉田文彦RECNA副センター長の司会でパネル討論を行った。パネル討論では、まず「現在の安全保障政策における核兵器の役割」について、藤原教授からは「核兵器の役割は小さくなっているが、政策の経路依存のためにいまだに核抑止に依存している」、太田教授からは「核抑止の効果について体系的な分析研究が必要」との指摘があった。続いて日本の安全保障政策についての議論となり、藤原教授は「抑止力は必要だが、核よりも



シンポジウム講演時の鈴木センター長  
(2017年11月23日 東京大学 撮影:RECNA)

通常兵器による抑止が重要」との意見を述べた。最後に北朝鮮への対応について、藤原教授は「現在進められているのは『威嚇』ではなく『強制外交』(相手側の政策変更を促すべく、強力な制裁と限定的な軍事圧力をかけること)である」点を強調し、「核を使った威嚇外交は失敗する」点を強調した。太田教授からは、RECNAの研究成果から「トラック2」の重要性が強調された。

最後に、RECNAの2教授も加えた質疑応答でも、フロアからは核軍縮の検証、日本の非核政策、ミサイル防衛などについて活発な質問、意見交換が行われた。共催して下さった東京大学政策ビジョン研究センターに厚くお礼申し上げます。

ナガサキ・ユース代表団

核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)  
: インターンシップを通じて感じたこと

ナガサキ・ユース代表団3期  
竹田 穰

私は、2017年6月下旬から8月末にかけてICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)でインターン生として仕事をさせていただきました。ICANはその名の通り核兵器廃絶に向けて精力的に活動している国際NGOであり、今年7月の核兵器禁止条約の採択に大きく貢献したとして、今年のノーベル平和賞を受賞した団体だ。私は核兵器禁止条約交渉会議の場にも足を運び、国際会議におけるICANの姿、会議のない普段のICANの姿を間近で見えてきた。そこで感じたのは、継続することの大切さである。

ICANは核兵器に関する国際会議で発言権を与えられており、会議に大きな影響力を持つ団体である。私はICANが具体的にどのように動いているのか、なぜ国際会議で発言できるほどの地位にいるのかというのが非常に気になっていた。ICANのメンバーが主に行っていたのは、政府関係者らに会議場外で声をかけて一緒にお茶をする、条文に関してのICANの意見に賛同する署名を各国政府代表1人1人に話しかけて集めて回る、といったことであった。もっと高度なことをしているのではないかと想像していたが、行動自体は難しいことではなかった。肩透かしを食った感覚を覚えたが、インターン生としての時間を過ごすうちに、こうした活動がICANメンバーと政府関係者らとの間の個人的なつながりを生み、会議を傍聴するだけでは得られない情報を得ることができたり、協力関係が構築されたりするということが分かった。会議が終わった後の通常業務も、条約採択に賛成票を投じた国に、条約に署名するかの確認や署名の後押しをするようなメールを送ったり電話を掛けたりすることが主であった。



オーストラリアの国会を訪問し、議員から核兵器禁止条約への支持をとりつけるICANスタッフ (左端筆者 提供筆者)

ICANが実際にやっていることの多くは、地道なネットワーク作りであった。それは一見すると地味な行動であるが、発足以来の10年間、折れずに続けてきたからこそ核兵器禁止条約の採択、ノーベル平和賞受賞という偉業に繋がったのだろう。ICANで過ごした2か月間は、「継続は力なり」ということを身を以て強く感じさせられた時間であった。今後も核なき世界に向けたICANの地道な活動に期待したい。

(たけだ じょう、長崎大学4年)

ナガサキ・ユース代表団

ナガサキ・ユース代表団:6期生決まる

核兵器廃絶長崎連絡協議会が主催するナガサキ・ユース代表団は、今年で6回目となり、6期生として、下記の8名が選ばれた。6期生は2018年4月～5月にジュネーブで開かれる2020NPT再検討会議第2回準備委員会に派遣される予定で、その前後、長崎から核廃絶へ向けての発信を行うために必要な活動も併せて行うことになっている。

- 長崎県立大学シーボルト校 国際情報学部3年  
工藤 恭綺(くどう みつき)  
第4期生を経て、改めて核兵器廃絶に向けて学びを深めア

クションを起こしたく第6期生として活動するに至りました。多岐に亘る考えを広く吸収し、出前講座などを通じて皆さんと活動を共有していきたいです。

- 長崎純心大学 人文学部2年 酒井 環(さかい たまき)  
5期生に引き続き6期生を務めさせていただきます。5期生での経験と、活動の中で感じた様々な想いを行動に変え、今以上に自分の意見を多くの人達へ、若者へ繋いでいける、発信者でありたいと思います。

●長崎県立大学 国際情報学研究科1年

孫 明悦(そん めいえつ)

初めまして、中国からの留学生孫です。今長崎県立大学情報メディア研究科に在籍しています。これからナガサキ・ユースの一員として、もっと勉強して、経験して、自分にできることを模索したいと思います。よろしくお願ひします。

●長崎大学多文化社会学部2年

中島 大樹(なかしま たいき)

長崎大学多文化社会学部2年の中島大樹です。今回の機会を通して、10年後、100年後の良き将来のための布石となる活動をしていきます。

●長崎大学多文化社会学部2年 永江 早紀(ながえ さき)

世界中が平和になることは本当に簡単なことではないと思います。でも、そんな世界の中でもいつか、誰もが安心して「今日も幸せだったな」と感じられる日が来ることを目指して、今自分にできることをユースとして頑張っていきたいと思っています。

●長崎大学多文化社会学部2年

原田 怜奈(はらだ れな)

私は進学がきっかけで長崎にきました。長崎では核問題や平和教育を考える機会が多く、次第に核廃絶に貢献したい、国際情勢を学びたいと思うようになり応募しました。ユースの活動では、市民運動の重要性や各国政府の動向を学び、核問題についての知見を深めたいです。

●長崎大学多文化社会学部2年

福井 敦巳(ふくい あつみ)

私はナガサキ・ユース五期生として昨年の5月、ウィーンにて行われたNPT再検討会議準備第1回会合に参加してきました。6期生では昨年得た経験や知識を活かして、平和のアクターとしてさらに活躍していきたいと思います！！！！

●長崎大学 環境学部4年 三浦 大輝(みうら たいき)

私はこれまで長崎で育ち平和教育や祖父母からの話を通して戦争の惨さや核兵器の恐ろしさを学び知りました。本活動を通して、様々なことを新たに知るだけでなく、その場で自分にできることを考え、貢献していきたいと思います！

## RECNAの活動

2017年10月1日～2017年12月31日

10月2日(月)	■国連軍縮フェローシップ研修生への講演 (中村准教授)	11月11日(土)	■外国メディア在京特派員プレストアール RECNA訪問 (鈴木センター長)
10月8日(日) ～10月12日(木)	■International Cooperation for Enhancing Nuclear Safety, Security, Safeguards and Non-proliferation(ローマ) (鈴木センター長)	11月14日(火)	■特別公開セミナー 「ノーベル平和賞受賞団体ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)の川崎哲さんに聞く:国際NGOで働くとは」 講師:川崎 哲(ICAN国際運営委員/ピースボート共同代表) 場所:長崎大学グローバル教育・学生支援棟 G3A教室
10月15日(日)	■公開シンポジウム「ハマーショルド元国連事務総長の遺産—その現代的意義について—」 講師:マグヌス・ローバック氏 (駐日スウェーデン大使) 場所:医学部良順会館専斎ホール	11月15日(水)	■RECNAラウンドテーブル 講師:ジャック・ハイマンズ准教授 (南カリフォルニア大学)
10月26日(木)	■日本非核宣言自治体協議会U-40世代の 交流事業講演 (広瀬副センター長)	11月23日(木)	■公開シンポジウム「核の脅威にどう対処すべきか ～北東アジアの非核化と安全保障～」 場所:東京大学伊藤国際学術研究センター
10月31日(火) ～11月3日(金)	■Cyber Security Workshop(ロンドン) (鈴木センター長)	11月29日(水) ～11月30日(木)	■国連軍縮会議(広島) (鈴木センター長)
11月4日(土)	■北海道・東北地協医学生合宿in長崎講演 (中村准教授)		

## RECNAの活動

2017年10月1日～2017年12月31日

- |          |  |           |   |
|----------|--|-----------|---|
| 12月3日(日) | ■JENESYS2917 太平洋島しょ国との青少年<br>交流一行来学<br>(中村准教授)   | 12月16日(土) | ■平成29年度核兵器廃絶市民講座<br>第5回「戦後長崎における被爆の痕跡と復興<br>——1940年代、50年代を中心に——」<br>講師: 桐谷 多恵子 (RECNA客員研究員)<br>場所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館 |
| 12月6日(水) | ■Journal for Peace and Nuclear<br>Disarmament(J-PAND)発刊記者会見<br>(東京・長崎)<br>(鈴木センター長、吉田副センター長) | 12月22日(金) | ■ナガサキ・ユース代表代第6期生任命式   |

## お知らせ

### ノーベル平和賞受賞記念 特別市民セミナー

「核兵器禁止条約をどう活かすか～ナガサキからのメッセージ～」

基調講演: ペアトリス・フィン  
(ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)事務局長)

パネリスト: 川崎哲 (ICAN国際運営委員)  
朝長万左男 (核兵器廃絶地球市民長崎集会  
実行委員長)

今西 靖治 (外務省軍縮不拡散・科学部  
軍備管理軍縮課長)

日 時: 2018年1月13日(土) 13:30～16:30

場 所: 長崎原爆資料館ホール

※受講料は無料、同時通訳あり、要参加申込。

(以下からアクセスして参加申込を行ってください)

UR: <https://goo.gl/forms/IVXoHDKeONrPw8Ef1>



### 平成29年度核兵器廃絶市民講座

「核兵器のない世界をめざして」

第6回 「『ゴジラ誕生』: 私たちの核兵器イメージ」

講 師: 広瀬 訓 (RECNA副センター長)

日 時: 2018年1月20日(土) 13:30～15:30

場 所: 国立長崎原爆死没者追悼祈念館

※受講料は無料、参加申し込み不要。

## 編集後記

最近北朝鮮からの漂着船が注目を集めている。実は11月の核兵器廃絶市民講座を担当していただいた広島平和研究所の孫先生は、韓国政府で働いていた時に、漂着船の処理を担当されていたことがあるという。孫先生によれば、「正月とチュソク(日本のお盆のような行事)の前は漂着船が増えます。祝賀のための高級海産物の納入ノルマが厳しいためです。ですから漁民は無理をします。エンジン付きの漁船が何隻もの木造船を遠い漁場まで曳航し、そこで離します。そして漁が終わるころにまた迎えに来るのです。漁をしている間に天候が変わったり、潮の流れがきつかったりすると、エンジンの無い木造船は簡単に流され、あちこちに漂着するのです。漂着船と漁民を北朝鮮に引き渡す際には、必ず積んでいる漁獲もそのまま渡します。もちろん冷蔵庫なんて積んでないですから、腐ってぐちゃぐちゃになっている場合が多いのですが、そうしないと漁民が北に戻ってから『漁をしないで、逃げようとしたのではないか』という疑いをかけられる恐れがあるからです。ちゃんと漁をしていて漂流したという証拠が必要なのです」ということ

だった。庶民の生活がこういう状態でありながら、北朝鮮が核やミサイルの開発に巨額の予算を費やすことを止める様子はない。まさに「欲しがりません、勝つまでは」を彷彿とさせる有様である。こういう国に対して「圧力」一辺倒の政策が本当に有効なのだろうか、疑問である。北朝鮮を「窮鼠」にしないためにも、どこかに「逃げ道」を用意しなければならない。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)



第6巻3号 2017年12月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター  
〒852-8521 長崎市文教町1-14  
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165  
E-mail: [recna\\_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp](mailto:recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp)  
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

印刷 インテックス

©2017 長崎大学核兵器廃絶研究センター

# RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

Vol. 6 No. 4 March 2018

## 核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)フィン事務局長 来崎 鈴木 達治郎

2018年1月12日(金)から14日(日)にかけて、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)のベアトリス・フィン事務局長が、RECNAの招待により来崎された。今回の来崎は、ノーベル平和賞受賞直後に、調学長特別補佐の指示により、できるだけ早い時期に長崎にご招待し、被爆者や長崎市民、そして若者との交流を実現することを目指したものであった。ICAN国際運営委員の一人である川崎哲氏(ピースポート共同代表)のご尽力により、早々と実現することができた。フィン事務局長にとっても、被爆地への訪問は初めて、ということもあり、精力的にハードスケジュールをこなしていただいた。

1日目(12日)は、原爆資料館にて、「ICANノーベル平和賞受賞記念展『私たちがつくる平和 ～核兵器禁止条約こそ世界の規範～』」のオープニングセレモニーに出席、その後は長崎大学河野学長はじめとする大学・RECNA教授陣との夕食会で意見交換を行った。

2日目(13日)は、午前中に爆心地において献花、その後原爆資料館の見学を行い、被爆の実相を再認識していただく良い機会になったと思われる。メディアに対しても「とても印象深かった」とのコメントを残された。そして、メインイベントである、RECNA主催、核兵器廃絶長崎連絡協議会、核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員会共催の「ノーベル平和賞受賞特別市民セミナー、『核兵器禁止条約をどう活かすか～ナガサキからのメッセージ』」に参加。約300名以上の市民を前に、基調講演、そして川崎哲氏、朝長万左男核兵器廃絶地球市民長崎集会実行委員長(RECNA客員教授)、今西靖治外務省軍縮不拡散・科学部軍備管理軍縮課長とのパネル討論にも参加していただいた。夜は歓迎レセプションにて、地元の市民団体や県・市議会関係者、若者たちと交流を深めていただいた。

3日目(14日)は、ナガサキ・ユース代表団の若者を中心に、地元の大学生・高校生約50名を前に、若者との対話集会「ノーベル平和賞団体『ICAN』のフィン事務局長と語る：核兵器廃絶と若者の役割」に川崎氏とともに参加していただき、印象深いスピーチと率直な意見交換を行っていただいた。最



原爆落下中心地で献花するフィン事務局長と川崎哲ICAN国際運営委員  
(2018年1月13日 写真提供:長崎市役所)

後に、ワーキングランチとして、RECNA教授陣と今後の協力活動などについて、意見交換を行った。

フィン事務局長は、その後、広島、東京で、とてもハードなスケジュールを精力的にこなし、18日(木)に離日された。広島では、広島平和文化センター、東京ではピースポート、ならびに核兵器廃絶日本NGO連絡会がホスト機関として、日程調整や会合のセットアップをしていただいた。関係者の皆様のご協力に改めて感謝の意を表したい。

このように、フィン事務局長の来崎(来日)行事は、予想以上の成果と印象を残した。最後に私が最も印象に残ったフィン事務局長の言葉を引用しておきたい。

「ボスは首相ではない。ボスはあなたたち市民です。政府(首相)は市民の声を聴いてそれに応える義務があります。市民が力を合わせて声をあげていきましょう。」

(すずき たつじろう、RECNAセンター長)

ベアトリス・フィン  
ICAN事務局長訪問

特別市民セミナー報告 核抑止と市民

広瀬 訓

ベアトリス・フィンICAN事務局長は、原爆資料館の訪問等を通し、初めての被爆地で、核兵器の非人道性と核兵器廃絶への思いをさらに深めたようであった。フィン事務局長は、1月13日に長崎市原爆資料館で開かれた特別市民セミナー「核兵器禁止条約をどう活かすか～ナガサキからのメッセージ」において唯一の戦争被爆国である日本こそが、核兵器廃絶へ向けて強かにリーダーシップを発揮すべきであると強調した。そして被ばく者の訴えが多くの人々を動かしたことが、最終的には核兵器禁止条約の採択につながったと語り、ICANのノーベル平和賞受賞は、被ばく者の方々と共同受賞というべきであるとその貢献を称えた。現在の民主的な社会においては、被ばく者の方々をはじめとする、市民の核兵器廃絶を願う気持ちと主張こそが、国々を動かし、核兵器廃絶の実現を可能にすると述べた。

しかし、核兵器禁止条約に対して明確に反対の姿勢を取る日本政府に対しては、当然のことながら、フィン事務局長は疑問を投げかけた。特にパネルディスカッションでは、フィン事務局長だけでなく、パネリストの川崎哲ICAN国際委員や朝長万左男RECNA客員教授、さらには傍聴していた一般市民の間からも、日本政府の姿勢に対する批判、疑問の声相次いだ。日本政府は、日米安保体制の下、北朝鮮の核開発や中国の軍備拡張という「厳しい現実」を踏まえて、アメリカの「核の傘」を否定するような政策は不可能であるという従来からの立場に変更を加える意図が無いことを繰り返し表明してきた。核兵器禁止条約の交渉に際しても、同じ理由で交渉への参加を拒否し、国連での採択では反対票を投じている。

セミナーを通して、核兵器の非人道性と核兵器廃絶を求める国々やICANに代表される国際社会に広がる核兵器廃絶を求める市民の声と、核抑止力に依存する安全保障政策を肯定する日本政府の立場との隔たりの大きさが明らかになると同時に、日本やアメリカのように核抑止に依存する国々を説得する難しさが浮き彫りになった。日本政府を説得し、核兵器禁止条約への参加を促すためには、日本政府の主張の土台となっている核抑止論そのものを根本的に見直す必要があると言わなければならないだろう。セミナー後のRECNA教員との意見交換の際に、フィン事務局長も、キャンペーンという形で核兵器禁止条約への支持を集めるには一定の限界がある旨に言及し、今後は核兵器禁止条約に反対している国々に対し、専門的な見地から理論的な説得を進める重要性をも指摘した。そして、そのような観点から、核兵器廃絶を求める市民の活動と、核軍縮を専門に扱う研究者との間の連携が、核兵



特別市民セミナーで発言するフィン事務局長  
(2018年1月13日 原爆資料館ホール 撮影RECNA)

器廃絶を実現するうえでは不可欠であるとの認識を示した。

ICANを中心とする市民社会の貢献や核兵器の非人道性を訴える国々の努力により、核兵器禁止条約は国連で採択されたが、その先行きはまだまだ不透明である。国連関係者の一部からは、条約案の採択で核兵器廃絶へ向けての人道アプローチの進展が一段落したとの認識が広がれば、せっかく盛り上がった核兵器廃絶への機運が停滞するのではないかと懸念すら見受けられる。核兵器禁止条約は、その実施に関し、具体的な議論を先送りにした部分を残したままの「未完成な」条約でもある。また、条約案の採択に賛成票を投じた国々の中でもまだ署名していない国が多数にのぼるだけでなく、批准まで終えた国は現時点ではごく少数に過ぎない。核兵器禁止条約に反対している国々の説得は言うまでもなく、賛成してきた国に対しても署名と批准を促し、条約の早期発効を実現するためには、これからが正念場であり、市民社会の力が試されるとの見解を、フィン事務局長は長崎訪問の締めくくりのように述べた。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

**ベアトリス・フィン  
ICAN事務局長訪問**

**希望を持ち続けられる人でありたい ナガサキ・ユース代表団5期生  
～ベアトリス・フィンさんとの対話を通じて～** 光岡 華子

「ベアトリスさんやICANメンバーのように、未来に希望を持ち続けられる存在でありたい。」

先日行われた、ICAN事務局長のベアトリスさんとの対談で、私が最も強く思ったことです。

私は今、“Peace Caravan隊”という学生の任意団体を代表を務めています。昨年の10月に仲間と共に設立したこの団体は、平和教育の出前授業を各地で行う団体で、個性豊かな14名で現在活動をしています。前身となる活動は、ナガサキ・ユース代表団4期生がスタートさせ、活動自体は今年で3年目になり、これまでに34か所で3,540名(2018.02.20現在)に、私たちの講演や授業を届けることができました。私はこれからもこの活動に携わり、将来的に多くの学生が経験を積むことができる場所にしたい、平和や核兵器について考えるきっかけを多くの人に与えたいと考えています。



学生と意見交換するフィン事務局長と川崎哲ICAN国際運営委員  
(2018年1月14日 長崎大学良順会館 撮影RECNA)



学生と意見交換するフィン事務局長と川崎哲ICAN国際運営委員  
(2018年1月14日 写真提供:長崎市役所)

そもそも私が平和活動に携わるようになったのは、大学3年目の昨年、ナガサキ・ユース代表団5期生の一員となった時からです。決して早くはないスタートでしたが、この分野に私を強く引き込んでくれたのが昨年3月NYで行われた“核兵器禁止条約第1回交渉会議”に参加した経験でした。

あの時に肌で感じた、国や身分という枠組みを超えて“人と人”が核兵器の禁止という同じ志の下で団結し、世界を動かす力となっている現実。目の前で力強くスピーチをするNGOや市民団体の人たちの姿は、とても頼もしかったのはもちろん、その人たちの熱い強い想いを、次なる世代の私たちが引き継がなければという使命感を抱きました。

そんな核兵器禁止条約の成立に大きく貢献したICANの事務局長との対談は、勇気づけられたという以外言い方がありませ

んでした。ベアトリスさんを始めとするICANの中心メンバーは、その多くが若者です。若者の役割や重要性を分かっているつもりで、私自身はPeace Caravan隊の活動を続けることを決めていても、なかなか将来の選択肢として“平和”という道を多くの若者が選ぶことができない現実も感じていました。自分たちの考えを発信しても非難されたり、そもそも平和では食べていけなかったり、このもどかしさを伝えた時、彼女はとても共感してくれました。そして、若者の秘密兵器は、未来への希望、何事もポジティブに捉えるエネルギー、世界と繋がるソーシャルメディアであると仰いました。志を同じくする世界中の仲間たちと繋がって“人”としてできることをやっていきたいと思います。

私がこれから進もうとしている道は、安定もしていなければ善意だけで続けられるものでもありません。核兵器の禁止も廃絶も、理想だ、と言われることがあります。しかし、私の前には頼もしい背中を見せてくれる大人達がたくさんいます。ベアトリスさんや被爆者のように熱い強い想いで、バトンを繋いでくれている人達があります。被爆者や戦争体験者無き世界が近づく今日、私達若者世代に何ができるのかを考え動き続けます。ただいつまでも若者と呼ばれるわけでもありません。だからこそ“今”という瞬間も、未来への希望を持ち続けられる人でありたいと思います。

(みつおか はなこ、長崎大学4年生)



## RECNAの活動

2018年1月1日～2018年3月31日

- |   |  |
|---|--|
| <p>1月13日(土) ■ノーベル平和受賞記念特別市民セミナー<br/>「核兵器禁止条約をどう活かすか?～ナガサキからのメッセージ～」<br/>講師:ペアトリス・フィン(ICAN事務局長)<br/>場所:長崎原爆資料館ホール</p> <p>1月14日(日) ■若者との対話集会<br/>「ノーベル平和賞団体『ICAN』のフィン事務局長と語る:核兵器廃絶と若者の役割」<br/>場所:長崎大学医学部良順会館専齋ホール</p> <p>■RECNAラウンドテーブル:ペアトリス・フィン<br/>ICAN事務局長を囲んで<br/>場所:長崎大学附属図書館医学分館</p> <p>1月17日(水) ■Plutonium Pathways: Collaborative Approaches to Managing Civilian and Military Stockpile参加(ウィーン)<br/>～1月21日(日) (鈴木センター長)</p> <p>1月20日(土) ■平成29年度核廃絶市民講座<br/>第6回「ゴジラ誕生:私たちの核兵器イメージ」<br/>講師:広瀬 訓(RECNA副センター長)<br/>場所:国立長崎原爆死没者追悼祈念館</p> <p>2月1日(木) ■戸田平和研究所:北東アジア問題コロキアム出席<br/>(鈴木センター長)</p> <p>2月8日(木) ■Center for Energy and Security Studies Workshop 'Prospects for Nuclear Energy in Japan Seven Years After Fukushima' (モスクワ) (鈴木センター長、広瀬副センター長)</p> | <p>2月19日(月) ■第2回長崎平和学生会議参加<br/>～2月20日(火) (鈴木センター長、吉田副センター長、広瀬副センター長)</p> <p>2月27日(火) ■Journal for Peace and Nuclear Disarmament 発刊記念シンポジウム「Nuclear Risks in Northeast Asia」(ワシントンD.C.)<br/>(調学長特別補佐、鈴木センター長、吉田副センター長)</p> <p>3月12日(月) ■平成29年度RECNA運営委員会</p> <p>3月15日(木) ■第2回RECNA「長崎被爆・戦後史研究会」<br/>「長崎における&lt;原爆&gt;の継承実践とその意義:幼児期に被爆した世代と若者の活動を中心に」<br/>講師:深谷直弘(福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 特任助教)<br/>場所:長崎大学核兵器廃絶研究センター</p> <p>3月17日(土) ■国際シンポジウム「アジアの核・ガバナンス・平和」<br/>～3月18日(日) 主催:広島市立大学広島平和研究所、RECNA<br/>場所:広島国際会議場 (吉田副センター長)</p> <p>3月22日(木) ■早稲田大学 Asian Future Leader Program RECNA訪問<br/>(広瀬副センター長、ナガサキ・ユース代表团)</p> |
|---|--|

## お知らせ

### RECNA叢書第3巻発行

鈴木達治郎、広瀬訓、藤原帰一編集『核の脅威にどう対処すべきか—北東アジアの非核化と安全保障』がRECNA叢書第3巻として法律文化社から刊行されました。定価は3,200円(税別)です。お近くの書店等でお求めください。



### 平成30年度核兵器廃絶市民講座 「核兵器のない世界をめざして」

第1回「北東アジアの非核化と安全保障」

講師:鈴木達治郎(RECNAセンター長)、

広瀬訓(RECNA副センター長)、中村桂子(RECNA准教授)

日時:2018年5月26日(土) 13:30～15:30

場所:国立長崎原爆死没者追悼祈念館

※受講料は無料、参加申し込み不要。



第6巻4号 2018年3月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター

〒852-8521 長崎市文教町1-14

Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165

E-mail: recna\_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp

http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 インテックス

©2018 長崎大学核兵器廃絶研究センター